

東京六大学応援団における女性の受容

ーバトンガールからチアリーディングへー

スポーツ文化領域

5012A034-9 杉山未那美

研究指導教員：杉山千鶴

1. はじめに

瀬戸によると、東京六大学の応援団は大学応援団の発展に大きく貢献したという〔瀬戸 2013:282〕。また、応援は長く男性の領域であったが、やがて女性による応援が根付き〔東京六大学応援団連盟 OB 会 1984〕、現在の東京六大学の各応援団は、主に男性の所属するリーダー部、男女による吹奏楽部、主に女性の所属するチアリーダー部の3パートから成る。

本研究は東京六大学の応援団、応援部、応援指導部、体育会応援団、運動会応援部（以後、「応援団」と表記）を事例とし、大学応援団において女性による応援（現・チアリーダー部、吹奏楽部員を除く）が受容され、定着していく過程について、東京六大学野球というシーンに注目しながら文献・資料をもとにその特徴を考察する。

また、ここでは応援に特化した行動をとる人々を研究対象とし、一般客は応援行為を行おうともこれに含まない。

2. 大学応援団の概観

大学スポーツの場面では、当初は観客が個々に拍手を送る、怒鳴る、野次するという応援が行われていた〔横田 1996:189〕。19世紀後期～20世紀初期に旧制第一高等学校において最初の応援組織が創設され〔GRAEWE 2002:188〕、早稲田大学においても1905年東京六大学野球・秋のリーグ戦・早慶戦からはアメリカの組織的な応援が行われる

ようになった〔横田 1996:189-190〕。1930年前後の時期からは、各大学の応援団は新しい手法を考案・導入し、パフォーマンス性を帯びた応援をするようになった。戦後、大学応援団は大学の復興に指導的な役割を果たしたとされ〔GRAEWE 2002:190-191〕、1947年5月には東京六大学応援団連盟が設立されている〔東京六大学応援団連盟 OB 会 1984:23,80〕。

以上より、大学応援団という領域はその創設以来、男性によるものであったことが分かる。

3. 東京六大学の応援における女性の参入と定着の過程

ここでは東京六大学応援団における女性の参入と定着の過程を1960年代から1990年代までの各年代ごとに考察した。

<1960年代>

慶應義塾大学において、新しい応援演出の一環としてバトンガールが登場し、これに触発されてほとんどの大学でバトンガールを起用している。しかし応援団内やそのOB、野球部からの反発を受けたため、継続するには至らなかった。

<1970年代>

バトンガールが受容されるようになり、1970年代後半には応援団内にバトン部が創設された。これをもって、女性による応援が定着したといえる。

<1980年代>

東京六大学応援団連盟では常任委員をリーダー

部と吹奏楽部から選出していたが、1985年にバトン部からも選出できるようになった。これにより、バトン部の位置付けは、応援団内においてリーダー部、吹奏楽部と等しくなり、また東京六大学応援団連盟という公的組織においても、その存在を認められるようになった。

<1990年代>

従来のスポーツ応援の他に、積極的に競技会へ参加するようになる。また、各大学ともチアリーディング部およびチアリーダーズに名称を変更している。

なおこの時期には、競技会出場に特化した活動をするチアリーディングの同好会等が設立されている。

以上より、従来の男性のみによる応援という領域の中に、女性はまずバトンガールとして参入したが、定着、あるいは公的認知を得るまでに長期間を要していること、そしてこのバトンガールが後のチアリーダー部の前身に相当することが考察された。

4. アメリカのチアリーディング

19世紀に男性の応援リーダーが登場したが、これは非公式な、自主的なものであった[Hatton and Hatton 1978:24]。19世紀末にはカレッジ公認の存在となる[Hanson 1995:11]。1920年代に入ると、カレッジスポーツもエンターテインメント性を強め、これを受けて、応援にも視覚的要素が要求されるようになる[同上:14]。この頃に女性が参入したが[Hatton and Hatton 1978:26]、それは大衆娯楽やメディアにおいて女性のセックスアピールが容認されていくという社会背景を受け[Hanson 1995:17]、応援においても同様の役割が重視されるようになったことによる[Adams and Betis 2003(B):29]。一方、1920年代当初から1940年代

までは、応援をリードする行為は男性的な領域であり、女性には不向きであると考えられていた[同上:28-29]。

5. 企業スポーツにおける女性の応援

当初の応援は無秩序なものであった。しかし1937年の時点でメガフォンと社名の入ったフラッグを持つ観客を確認できるように[60年史編さん委員 1990:50]、徐々に統制がなされていった。また都市対抗であるがゆえに、その応援には郷土色と企業アピールという要素も求められ、独自性を伴った演出が施されるようになった。1950年からは女性が起用される[同上:96]が、これはその一環と考えられる。1950年代には、常盤炭鉱によるハワイアンダンス[同上:106,108]や全大丸による「舞子」[同上:120]など、華やかな演出の応援が登場した。

6. 東京六大学応援団における女性の受容

ここでは、東京六大学応援団とアメリカのカレッジスポーツ、企業スポーツにおける応援を比較し、その共通点と相違点を考察した。その結果と3.により、東京六大学応援団における女性の受容の特徴として、以下の点が明らかとなった。

- (1)1960年代に、演出効果の革新を図るために女性を応援に起用した。
- (2)応援と応援のメイン台への神聖視や学生野球に適さない等の理由により、女性による応援は容易に受容されなかったが、応援団内において、従来のものとは別の組織として共存するようになった。
- (3)チアリーディングの前身はバトンを手具とする応援であり、いずれも女性によるものであった。